報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

2019年　4月　16日

関西学院大学 学長殿

所属：国際学部
職名：教授
氏名：山本雅代

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☑特別研究期間　□自由研究期間 □大学共同研究　□個人特別研究費 □博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	受容バイリンガルの言語発達と言語使用：10年超にわたる縦断研究の総括
研究実施場所	自宅・大学研究室・図書館・アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市
研究期間	2018年　4月　1日　～　2019年　3月　31日（　12ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

特別研究期間中における研究成果報告

山本雅代

特別研究期間中に実施した研究（作業）としては、大きく、以下の３件に収斂することができる。

（１）2009年度開始から2018年度末までの通算10年（3期）に及ぶ科研費によるバイリンガルの言語習得・使用状況の縦断研究の執筆作業

第1期：2009～2011「同時バイリンガル幼児の言語発達研究」

第2期：2012～2015「受容バイリンガル児の言語発達研究」

第3期：2015～2017+2018「受容バイリンガルの言語発達と言語使用」

（２）2017年度末に出版社から依頼を受けて開始し、今年度半ばに発刊予定となっているバイリンガリズムを扱った論文集の編纂

（３）日本財団の助成を受けて発足した大学の特別プロジェクトの１つ「手話言語研究セン

ター」の研究活動の１つとして、センターの中島客員研究員と共同で、CODA（コーダ：ろうの親を持つ聞こえる子どもを指す用語）を対象とした言語環境（山本担当）や心理的内面の実像（中島担当）を明らかにしようとの試みとして、2017年度に実態調査を行った。その調査結果を2017年度後半から2018年度にかけて集計し、またその結果の分析を開始した。

（１）については、「純粋な」意味での研究であり、（２）については、これまでに発刊されたバイリンガリズム研究者執筆の研究論文の論文集編纂ということで、いわゆる「純粋な」意味での研究そのものではないが、（１）の研究と関わっていることから、ごく簡潔にでも、併せて報告したい。また（３）についても簡略な結果報告を行う。

まずは、（１）の研究であるが、この研究の大きな目的は、子どものバイリンガル発達状況は、母親の言語使用のあり方に照らして、どのように進むのかという言語の発達の軌跡を明らかにしようとするものであったが、研究開始当初は、研究対象の女児は日本語もそれなりに使用していた（よって、コードスイッチングに焦点をあてた分析も行った）が、年齢が上がるにつれて、日本語の使用が漸次減少し、経年減少が明白になった。それと同時に、母親の言語使用にも極めて興味深い現象が観察されるようになり、それまでは、その使用がほぼ皆無であった英語の使用が母親の発話に散見されるようになり、総体的に両者の対話における日本語の使用が減少、英語の使用が増加した。受容バイリンガルは、経年に伴い、自身が非優勢言語をますます使用しなくなるだけでなく、その非優勢言語の主たる入力源である養育者（母親）が、その発話に（受容バイリンガルにとっての）優勢言語を取り入れ始めるようになることから、非優勢言語の使用が励まされるような言語環境を徐々に失っていく。

なお、特別研究期間に入ってまもなく、研究対象となっている女児の母親より、当該の女児の今後の進路に関して、日本語能力の向上がこれまで以上に必要になる旨の報告があり、それについての詳細な説明と今後の計画に関する情報収集のために、再度（かつ最後の）面談の機会をもった。プライベートな側面に触れることになるため、ここでは事情の詳述は避けるが、今後、ある一定期間、日本で仕事・生活をする可能性が高く、この女児のバイリンガル能力については、受容から産出へという、これまでとは逆方向への発達を観察しうる貴重な段階に入るものと思われる。

こうした分析を含めて、本研究から得られた成果は、図書という形で刊行したいと考え、その作業を特別研究期間中に開始した。その作業を進めるために、わずか2週間ではあったが、女児の新たな進路および日本語の必要性の高まりに関して、詳細な事情の聴取のため、新たな面談を実施することを１つの目的とし、さらに、執筆の開始、進展を今１つの目的として、この特別期間中に短いながらも、現地ハワイに2週間強滞在し、牛歩の歩みながら、執筆を進め、「序論＋８章構成」の内、序論＋第4章をほぼ書き終え、現在、第5章に取りかからんとするところである。出版を目指す出版社については、この段階では全く白紙の状態であるが、暫定的にでも、図書として査読の対象となる段階まで執筆を進めた後、本書のテーマに相応しい出版社を選択し、査読依頼を始めたいと考えている。なお、現在、英文にて執筆を進めており、バイリンガリズムの専門書を多く扱っている海外の出版社を勘案している。

（２）バイリンガリズムを扱った論文集の編纂

上記（１）の研究を遂行する上で、バイリンガリズムに関する多くの論文、図書を読み込んできたが、全く偶然のことながら、アメリカ、イギリス等にオフィスを置くSage出版社より、バイリンガリズムに関する既刊の論文を集めた論文集の編纂の依頼を受けた。すでに論文集は編纂し、4巻からなる論文集を完成し、Sage社に提出済みである。この7月にまずは、インドで刊行、翌月8月にはイギリスで刊行、ついでアジア・欧米に配本という手順で、9月初頭には日本の書店への入荷の見込みとのことである。この論文集は、特別研究期間中に執筆を進めた科研費による研究の直接の成果ではないが、当該研究の副産物とも言えるものであり、両者は密接に関わっていることから、併せて報告しておきたい。

（３）この調査からは、きわめて複雑な家族間の言語環境が明らかになった。この種のアンケート調査では、無作為抽出ができず、回答をそのまま一般化することはできないが、以下のような興味深い結果を見た：1) 両親が共にろう者の家庭では、両親間の使用言語は手話言語が主要言語となっている；2) ただし、大変興味深いことに、両親が共にろう者である家庭でありながら、使用言語として、手話言語と共に「日本語」を含めた回答をした家庭もあり、実際にどのような形態で日本語使用しているのか（音声日本語なのか、筆談なのか、空書なのか）、複雑な家族間の言語使用状況が推測される結果となった。この研究では、関わる言語は音声言語と手話言語と異なるタイプの言語ながら、いずれも複数の言語を用いる家族であり（少なくとも、家族の一部は複数言語使用者である）、当然のことながら、こちらもバイリンガル研究の一環である。

（2500字）

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内
※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで
提出先：研究推進社会連携機構（NUC）
※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。
◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。